



## 4 建築のひろがり

## 第12章 グローバル人材育成と留学

筆者の勤務する芝浦工業大学は文部科学省のグローバル人材育成推進事業や、スーパーグローバル大学創成支援事業（SGU事業）のグローバル化牽引型に採択され、海外の大学との学生交流、教育プログラムの国際通用性の向上、学生のグローバル対応能力育成などに取り組んでいる。学生の海外留学を増やすことなどにより、単に英語が話せるだけでなく、多様な価値観を有した海外の人達と協力して仕事をすることができる人材の育成を目指している。インターネット等の普及により海外の情報に接する機会が増え、日本の大学も国際水準の教育・研究環境が整ってきたことも影響して、若い世代はかつてほど留学に関心を持たなくなっているのかもしれない。しかし、自ら外国に行き学んだり、海外の学生を受け入れて共に学んだりすることが、若い人にとって有益であることは今も、変わりはないだろう。筆者自身、今から30年以上も前の1984年、アメリカのマサチューセッツ工科大学（MIT）に2年間留学した経験がある。自分の殻を破り、多くのことにチャレンジした20代の経験は、今でも仕事だけでなく、私の生き方や価値観の基礎となっているように感じている。当時もMITには世界各国から教員や学生が集まり、交流する場となっていた。日本人同士で話をするとならぬと誰かが当たり前で、議論する余地がないと思っていたことが、色々な国から集まった人達が議論すると、思いもよらない結論にいたる経験をしたこともある。将来の日本を担う若い人たちには、短期、長期の留学や、外国から招聘される教員や学生との交流を通して、広い視野と柔軟な思考力を持った人材に育つことを願い、自分が出来る範囲ではあるが国際交流に取り組んでいる。

この数年、私の研究室にも色々な国から学生が進学してくるようになった。ナイジェリア出身のOluwasegun Oluwafemi Akande（オルワゼグン オルフェミアカンデ）君は、ラゴス大学卒業後、地元州政府にて公共事業や公営住宅の計画・建設、

管理に携わってきた技術者である。安倍総理が2013年6月に第5回アフリカ開発会議で表明された「アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ（ABEイニシアティブ）」のプログラムに参加し、2015年9月から2年半に渡って、芝浦工業大学に留学して来た。彼の経験によるとナイジェリアでは、厳しい気候に対応した建築設計や維持管理の技術が未整備のため、公共施設や公営住宅等の劣化が激しく、補修に予算がかかるため、少ない財源を新築工事に使えず苦勞しているとのことで、その改善策を日本で研究して、今春帰国した（写真2）。2016年4月から留学してきたサウジアラビアの女性建築家のHijazi Najwa Yousef S（ヒジャズイナジュフ）さんは、母親の母国ヨルダンで建築教育を受け、父親の母国サウジアラビアで建築家として実務経験をしたのち、サウジアラビア政府の奨学金を得て日本に留学してきた。アラビア語、英語はもちろん日本語も堪能で、大学院を修了して、現在、日本の建築設計事



写真2 ナイジェリア、ラゴス州の公営住宅  
Oluwasegun Oluwafemi Akande 撮影  
維持管理が悪く劣化が激しい。設備シャフトのメンテナンスも困難。



チャールズ川沿いに広がるマサチューセッツ工科大学キャンパス

写真の手前はボストンの旧市街地バックベイ地区。マサチューセッツ通りが写真中央のハーバード橋を渡り対岸のケンブリッジ市に入った右側（東キャンパス）にMITの正面玄関があり、教室、研究所が配置されている。左側（西キャンパス）には学生寮、学生会館、教会、運動施設が広がる。チャールズ川を上流（写真左側）に行くとハーバード大学がある。

務所に勤務している。中華人民共和国からは、胡天行（コテンコウ）君、劉瀟陽（リュウ ショウヤン）さんが、すでに2年間の修士課程を無事修了し、日本企業に勤務している。二人とも日本語学校でしっかり、日本語を習得してから入学しているため、高度な意思疎通が可能であり、後述する中国の大学と芝浦工業大学の交流プログラムを立上げ、実施するための懸け橋となってくれた。胡君は中国の高校を卒業後来日し、学部、大学院の合計6年間を芝浦工業大学で過ごした。劉さんは北京の建築設計事務所に勤務した後、来日している。その後も中国の合肥工業大学の修士課程を修了した馬凌翔（マリンシャン）君が南研究室に在籍し、中国の大学との交流を手伝ってくれた。短期の留学生も増えており、2018年1月からは北京出身で米国在住のYvonne Fang（イボンヌ ファン）さん（Dartmouth College 卒、2018年秋からはハーバード大学大学院に進学）や、2018年3月からはインドネシア・スラバヤの大学院生 Annisa Nur Ramadhani（アニサ ヌール ラマダーニ）さんを受け入れた。2017年度は、中国、黄山学院の学部3年生4名を1年間、交換留学生として受け入れた。色々な国から縁あって私の研究室にやってくる学生達から教えてもらうことが多く、私の視野を広げ、人生を豊かにしてくれている。

## アメリカからケンドル教授を招聘

グローバル人材育成のため芝浦工業大学が力を入れているのが、グローバルPBL（Project-based Learning、課題解決型学習。略してgPBL）である。gPBLでは、海外の様々なバックグラウンドを持つ学生達とのディスカッションや協働作業を通して、グローバル人材に必須とされる4つの能力であるコミュニケーション力、グローバル人間力、異文化理解力、問題解決能力を身につけることを目指している。

筆者は、2013年と2014年の夏に、アメリカ・インディアナ州のボールステイト大学からステファン・ケンドル教授を招聘して、建築設計ワークショップを開催した。筆者とケンドル

教授は1980年代中頃、ともにマサチューセッツ工科大学大学院に在学し、ハブラーケン教授の指導を得ていたため、ハブラーケン教授がMITで教えていた建築設計論・設計法 Thematic Design Theory and Methodを日本の学生に教えることにした。Thematic Design とは、ごく簡単に述べると、地区に潜在する建築の構成あるいは空間的な共通言語を見出し、それを応用して統一感と多様性を持った建築群を生み出す設計手法と言える。芝浦工業大学に留学中のロシア人やフランス人も参加し、学部、大学院の学生約20名が、6つのチームを構成して、大学が立地する江東区における将来の街の姿を提案した。

## 中国、合肥工業大学との交流

2015年の秋からは、毎年、学生と共に中華人民共和国安徽省の合肥工業大学や、黄山学院などを訪問し、フィールドワークやワークショップなどを行っている。合肥工業大学は、中国の重点大学のひとつで、中国の21世紀を担う100大学の一つである（写真3）。建築芸術学部の李早院長（学部長）は京都大学で、蘇劍鳴副院長（副学部長）は東北大学で学位を取得された知日家である。筆者は蘇副院長を20年近く前、東北大学の伊藤邦明先生の研究室に日本政府の留学生として在学されていた当時から存じ上げていることがご縁で、学生を引率して訪中し、合同でワークショップを実施することになった。

蘇副院長によると中国には建築学の専門教育を行っている大学が300ほどあり、その中で5年制の国際基準の建築教育を行っている大学は約30あるとのこと。合肥工業大学は5年制の教育を行っている大学の一つで、中国における建築教育を行うトップクラスの大学である。建築芸術学部は、建築、環境設計、都市計画、ランドスケープデザイン、平面計画（サイン、工業意匠）、広告、インダストリアルデザイン、芸術（彫刻、絵画など）等の7分野で構成されており、学生数は学部生が1500人、大学院生が300人である。専任教員は70名、職員は30名。建築を専攻する80～90名の学部卒業生のうち、

3分の1が就職、3分の1が中国国内の大学院に進学、3分の1が海外の大学院（ほとんどがアメリカ）に進学している。建築分野は中国の経済成長を反映して、これまでは給与水準が高く、優秀な学生が集まる分野であったが、近年、経済成長が鈍化し、就職状況が悪化しているとのことである。

建築学科の学生には1年生から5年生まで、各学年に製図室があり、各学生には専用の製図スペース（製図板など）が与えられている。1年生、2年生は手で図面を描く授業を行っており、2年生になるまではCADは禁止だとのことである。4年生の製図室では、学生がお金を出し合ってコピー機を購入していた。レーザーカッターも学生たちがお金を出し合って設置している。授業で使用する模型の材料も、学生が自主的に共同購入し、使用した分の料金を料金箱に入れる仕組みである。中国では1年生の時、1か月の軍事教育が必修科目に指定されていると聞き、驚いた。実態は体育の授業のようなもので、学生生活に規律を与える効果もあるとのことである。建築学科の学部2年生は、毎年夏休みの3週間を使って、安徽省の伝統的な集落を訪れ、古民家の実測を行っている。学生は測量した建物の図面をCADで図面化するだけでなく、3次元の動画としてもまとめており、高いレベルの教育を行っている。5年生の前期はインターンシップ、後期は卒業設計を行う。卒業設計では、精華大学などトップクラスの大学8校ほどの選抜学生による共同設計を行うこともある。各大学から参加した学生が合同で敷地調査と開発計画の立案までを作業し、中間発表の後は、各大学に戻って個人が設計をして、最後にまた一堂に会して成果発表会を行っている。なかなか良い教育方法のように思えるが、蘇副院長によると、中国では4年生の後期に就職が決まるため、5年後期は学生のモチベーションが上がらないそうだ。

私の印象としては中国の大学の先生方は、非常に熱心に教育に取り組んでおられるように見える。例えば、中国では建築教育に関する学会を毎年、各大学の持ち回りで開催して、意見交換を行っている。丁度、筆者が合肥工業大学を訪問した時、選抜された22の大学における1年生から5年生までの建築設計

演習の課題と学生の成果物の展示を拝見することが出来た。優秀作品には賞が授与されるが、中国全体の選抜作品という事もあり、受賞作品の水準は高い。興味深いのは、学生の成果物だけではなく、教員が出題した課題の内容も審査の対象になっていることである。中国でも1992年より日本のJABEEと同じような教育の質保証のための外部評価を行っているとのことだが、自己点検書やエビデンスの準備のため、担当教員が多忙を極めるのは、わが国と同じである。合肥工業大学は、最初に受審した大学の一つで、学部と大学院の両方の教育プログラムの認証評価を受けた意欲的な大学である。



写真3 合肥工業大学、建築芸術学部棟  
延べ4万2千㎡（地下1階、地上7階建）と大きな建物。郊外に移転した新キャンパスには、人口池や野外劇場などがゆったりと配置されている。



写真4 黄山学院、建築工学部正面にて前列は筆者と黄山学院の教職員の方がた。後列は芝浦工業大学の学生。(2015年11月)

## 黄山学院との交流

南研究室に在籍していた胡天行君の叔父様、胡跃进先生が学部長をされていることが縁で、2015年秋以降、毎年、安徽省黄山市の黄山学院とも交流を行っている（写真4）。2016年1月にはMOUを締結し、芝浦工業大学の海外協定校になっていた。校地面積は118万㎡あり、学生数1万8千人、50学部で構成されている。黄山市は上海から南西に直線距離で約400kmのところと位置する。揚子江の南側であるが、周辺には山が多く、夏は37度を超える日が続くが、冬はかなり冷え込む。唐代末期、北京から逃れてきた人々が住み着いたと伝承されるが、この地の徽州文化は、チベット、敦煌とならぶ中国三大地方文化の一つとされ、白壁とグレーの瓦が特徴の徽州建築も徽州文化を代表するもののひとつである<sup>注1)</sup>。黄山市周辺には徽州の古民居が残された集落が100近く点在しているが、その中の西遞、宏村（写真5）はUNESCOの世界遺産に指定されている。山水画に描かれるような姿をした「黄山」も世界遺産に指定されており、黄山市は市内に存在する2つの世界遺産を活用して観光産業に力を入れている。黄山学院も観光学部を設置するなど、観光や国際交流の教育に熱心に取り組んでいる。

建築工学部は建築、土木、都市農村計画、工程建築（工事管理など）の4つの学科で構成されている。学部全体の専任教員は36名、そのうち建築学科担当は9名である。周辺に美しい集落、伝統的古民居が数多く残されているため、国家が定めた基本的な教育内容に加えて、徽州の伝統建築の保存とその活用について学修することを教育目標として定めている。授業は8時30分始業で、17時50分まで。その後は課外活動としてスポーツ等を楽しむ。体育の授業には、卓球、太極拳の他、学年末の祭りの際に龍を掲げて踊るダンスも開講されている。学生は全員、キャンパス内の寮に住んでいる。寮は4人部屋であるが、各部屋に温水シャワーが設置されている。

建築学科の学生数は1学年あたり60名であり、設計演習は15名ずつに分けたグループで教育している。建築設計演習は、

2年生で1課題、3年生で年間4課題、4年生で年間4課題を行うので、5年進学時までには9課題行うことになる。小学校や図書館が設計課題として取り上げられるのは日本と同じだが、日本とは違って架空の敷地を対象に設計することである。5年生後期の卒業設計は建築学科の全員が履修する。卒業設計は6単位で12週間かけて行っている。設計教育担当の王教授は、中国では建設の速度があまりに早かったので、教育にもその弊害が出ており、建築設計の質を向上することが必要と述べておられた。もう一人の設計演習を担当されている建築家の黄冠軍教授はこの地方の伝統的集落を10年以上にわたって、学生と一緒に調査され、報告書にまとめておられる。

学生の就職先は建築学科60名の卒業生の内、40名が安徽省建築設計院や民間設計事務所、残り20名の内、十数名が大学院に進学し、数名が公務員になるとのこと。設計系の就職活動は、4年生までの設計演習課題をポートフォリオにまとめて提出することが第1次審査となり、それに合格すると第2次審査（6時間の即日設計と面接）に進むことになる。大学の成績は直接、影響しない模様であり、大学教育の理解度は面接試験の時に口頭試問される程度である。

2018年2月1日付で建築工学学部長が胡跃进先生から趙士徳教授に異動があった。新学部長は当時50歳。中国浙江大学で地球科学を専攻し、卒業後はロシアでロシア語の通訳など10年間ほど実務に従事された。趙教授が育った時代は、第1外国語は英語またはロシア語の選択であったとのこと。その後、出身地のハルビン大学で企業経営に関する修士、博士の学位を取得されたが、当時の中国では、理系出身者が文系に転向する際、企業経営学を専攻することが多かったそうである。学位取得後、黄山学院の教員になられた。中国の大学の学部長は共産党の人事だが、別の学部の教員が指名されることは珍しくないとのこと、趙学部長の前任は経営学部の副学部長である。前の建築学部長の胡跃进先生の専門は数学で、学部長を退任された今は、元の学科に戻って数学を教えておられる。



写真5 安徽省古集落を代表する宏村の月沼

集落は牛の形になぞらえて説明され、中心部にある月沼は牛の胃にあたる。川の水を巧みに集落の内部に取り入れ、生活用水として利用している。



写真6 黟県、盧村にある志誠堂の中庭（天井と呼ばれ、屋根がない空間）

写真の右側に狭い道路に面した入口がある。徽州建築の特色は精緻な木彫、石彫、磚彫である。西遞、宏村に近い集落。



写真7 黟県の関麓 汪氏の8人兄弟の商人の家が小さな集落を構成する。一部、二階部分が繋がり、家族が行き来できたという。

別の分野の先生が学部長として組織をまとめる中国の大学運営の方法は、私の限られた経験ではあるが、上手く行っているようである。

日本から黄山を訪問する私たちの楽しみの一つは、安徽省の古村落、古民居群の訪問である。これまでに現地調査した集落は、黟県の西通、宏村、盧村（写真6）、秀里、屏山、関麓（写真7）、南屏、歙県の徽州古城、棠樾、昌溪、陽産土樓、許村、黄村、休寧県の溪頭、徽州区の呈坎、唐模（写真8）、潜口、靈山、旌徳県の江村、朱旺、婺源県の江湾、嚶起、績溪県の龍川（写真9）などである。徽州建築の特徴である木彫、石彫、磚彫を作る職人の工房や、工業団地内にある木彫、石彫の加工工場を視察したり、休寧県万安老街の古民家を実測したり、あるいは黄山市周辺の鄭村鎮西園の古民家の修理

現場を見学したこともある。2017年秋には中国の古城城壁をUNESCOの世界文化遺産にするための意見交換を歙県文物局の担当の方々と行った。周辺の集落を視察した後、夕方には黄山市にもどり、旧市街、屯溪の老街を散策するのも楽しみである。

参加した学生たちは、日本でメディアから得ている情報と、現地で自分の目で見て知った現実との違いを認識する機会となったと述べている。国際的な混成チームによるワークショップに参加し、学生たちは異口同音に英語の力をつけるべきと言っているが、まず海外に行き、たとえ覚束なくても英語で議論してみることが、帰国後の学習意欲を高める契機となっている。自分の進路を考える上でも、大変良い刺激を得たとのことである。卒業後に早速、ニューヨークや上海、シンガポールの現場で活躍している卒業生もいる。



写真8 徽州区の唐模 集落の中心を川が貫いている。



写真9 績溪県の龍川 川に面して胡氏宗祠が建つ。

## 私の留学経験を踏まえて

筆者は1984年7月から1986年6月まで、アメリカ東部のマサチューセッツ工科大学（MIT）の大学院に留学した。日本の大学院を修了し、郵政省建築部に3年勤務した後の20代最後の2年間である。MITに到着する前の6週間、テキサス州立大学オースティン校において、世界59か国から集まった100名以上のフルブライト奨学生と共に夏期研修に参加した。学生寮のルームメイトは、ウルグアイの会計検査院の職員、ヨ

ルダンの大学で法律を教えている教員、西ドイツのエンジニアであった。午前中は英語の授業を受け、昼からは専門分野に応じて色々なところに見学に行くのだが、興味があれば他の分野の研修に参加することも出来た。法律分野の研修に同行して、法廷の見学に行ったが、陪審員を選ぶ過程、犯人を逮捕した警官の証言、弁護士の反論など、テレビや映画で見ている場面より、迫力があつた。電子工学分野ではモトローラの工場を見学したが、日本企業との競争が厳しい時期で、職員はピリピリしていた。都市・建築分野の見学はオーティンの住宅地を所得階層別に7か所見て回るという企画だったが、一番、低所得の方が住まう住宅は小さな木造小屋で、暑いテキサスの気候のため住戸の前のテラスで過ごしている人が多かった。車から降りることは出来ないし、カメラを向けることもできない。報道などで見ることがないアメリカ社会を垣間見た。一方、最も高級な住宅地は、街を一望する丘の上に立つ豪邸で、こちらはアメリカのテレビ番組などで良く見る光景であった。丁度、アメリカ大統領選挙の年で、レーガン大統領の遊説第一声を聞くため、皆で市内の河川敷に出かけた。集まった大勢の人をコンテナが囲み、その上に狙撃兵が銃を持って構えている。レーガン大統領が到着した時、会場は大変な盛り上がりで、にこやかに、わかりやすい英語で語りかける大統領の政治家としての力量、共和党の選挙キャンペーンのうまさを実感した。フルブライトの夏期研修はテキサスの牧場にロデオを見に行ったり、地元の方々が牛一頭丸焼きにするバーベキューパーティを開催してくださったり、川に泳ぎに行ったりと、実に盛りだくさんの企画であった。ヒューストンのジョンソン・スペースセンターを見学したとき、東欧からの留学生はソビエトのコントロールルームにそっくりだと言っていた。当時、東欧からフルブライトの奨学金を得てアメリカに留学する学生は、事前に一度、ソビエトに集められて研修を受けるのだそうだ。ヒューストンではMITのOBでデュボンに勤務する方のご自宅にホームステイさせて頂いた。広々とした住宅地には運河が引き込まれていて、自宅の庭からボートで海に出て行くことができる（写真



写真 10 フルブライトの夏期研修でホームステイさせて頂いたヒューストンの家庭からボートに乗って、ガルベトン (Galveston) 湾まで昼食に行った。



写真 11 MIT の大学院生用学生寮のアシュダンハウス (Ashdown House) 1901 年に開業した Riverbank Court Hotel を MIT が 1937 年に購入して全米で 2 番目の大学院生用の寮に改修した。今は同じ名前の寮がキャンパス北に建ち、この建物は学部生用の寮に改修されている。MIT では近年、学生寮が持つ人間教育の場としての重要性を認識して、学部 1 年生は原則、学生寮に住むことを義務付けている。学生達がともに食事をとることが大切であると考え、食堂も充実させている。戦後、アルバー・アアルトが設計した学部生用の寮ペーカーハウスもチャールズ川に沿って走るメモリアルドライブに面して、近くにある。

10)。庭に出ているら、奥様から「あそこを歩いている方、先日、月に行ってきた宇宙飛行士のかたよ。」と言われた。オースティンでの研修も終わりに近づいたころ、ハンバーガーを食べてい

たレストランで、たまたま隣の席に座っていたアメリカ人が親切な学生で、ウィスコンシンの自宅に招いてくれた。お父さまがジョンソンワックスに勤務しておられて、日曜日、フランク・ロイド・ライトが設計したジョンソンワックス本社ビルの中を、役員室を含めて自由に案内していただいた (写真 14～18)。シカゴ北部のミシガン湖に面してつながる住宅地は、素晴らしい環境であった。

6 週間の夏期研修を終え、学生たちは全米の大学に向かうことになるが、楽しい日々はここまでで、大学に到着すれば猛勉強の毎日が始まる。移民の国、アメリカでは、留学生がお客扱いされることはないと言ってよいだろう。大学に到着してまず、苦労するのが住宅の確保だが、私が学生課を訪問したら、大学院生用学生寮のアシュダンハウスに 1 名分だけ、空きがあるという (写真 11)。直ちに契約し、部屋に行ってみると、その部屋の住民は、米中国交正常化後、初めて中国からアメリカに留学して来た 5 名の物理学者の一人、金亜秋さんだった。アメリカ人は共産党員ではないかと思ひ、同室を避けていたらしい。金亜秋さんは、北京大学の物理学科を卒業し、気象庁に勤務していたが、文化大革命の時は地方に行き、絵が得意なので毛沢東の絵を看板に書いていたという。いろいろ話をしてみると共産党員ではなく、簡単に党員になれるものではないと説明してくれた。1984 年頃でもアメリカから中国に電話をするのは大変で、中国の奥様に電話をかけても、つながるのは翌日であった。専門はリモートセンシングで、その技術を使って雲の温度変化を図り、集中豪雨を予報するのが彼の夢だった。論文を発表するとシベリアの雪の下に隠してある戦車を見つけることができるかという質問が来ることがあると言っていた (もちろん、見つけられないが)。彼は朝起きたらすぐに研究室に行き、就寝直前に帰宅する。日曜日にも研究する。世界最先端の研究をしていると、たとえ一日休んだだけでも、その瞬間に追い越されると言っていた。苦労して学位を取得した夜、アメリカに来て初めてビールを口にしていた。渡米した時、中国政府から 5 ドル渡され、あとはアメリカが面倒を見ると説明されて、パリ経由でアメリカに渡ってきたそうだ。RA (Research Assistant) の給与の

中から貯金をして、5 年間に 1 万ドルを貯めたという。MIT で学位を取得し、上海近郊に新設された大学の助教授の職に就くことが決まったが、1 万ドルは助教授の 25 年分の年収に相当する金額だと言っていた。当時の中国は、住宅や車を購入することはできなかったの、何に 1 万ドルを使うのかと尋ねたら、しばらく考えて、「息子をアメリカに留学させるのに使う」と語った。金亜秋さんはその後、上海にある復旦大学の教授になり、今は中国物理学会を代表する院士 (アカデミー会員) である。



写真 12 MIT のポートハウス  
ヨットの授業を履修した学生は、時間外にヨットを借りることができる。



写真 13 1985 年 学生時代の筆者。

## MIT での学生生活

MIT の講義の内容についてはここでは省略するが、学生生活について今でも記憶することを書き留めておきたい。学期始めの履修登録には指導教授のサインが必要であるため、研究室に伺い自分の MIT での研究目的と履修を希望する科目の関係など、学習計画をきちっと説明する必要があった。学科事務室の入り口に提供されている A4 サイズの授業計画書 (シラバス) をよく読み、各講義の目的、内容、ワークロードなどをよく理解しておかなければならない。MIT の授業は基礎的な事から始まるが、最終的な到達レベルは高い。教授からは MIT の講義 1 科目は、他の大学の修士論文ぐらいのワークロードがあると説明を受けた。私は息抜きもかねて学部の体育の授業を履修した。大学の横を流れるチャールズ川でヨットに乗りたかったので、その前提となるヨットの授業を受けた (写真 12、13)。ヨットの授業を履修するためには水泳の試験に合格しなければならないが、受験する学生が多く、30 分間の立ち泳ぎの試験では、周囲に少しでも体が動く、前後左右の学生からあちに行けとつつかれ、途中で断念。幸い追試をして頂くことになったが、追試では広いプールに受験生がほとんどおらず、教員から泳いでいても良いと言ってもらったお陰で無事合格し、念願かなってヨットの授業を受ける事が出来た。他に受講したアメリカならではの体育の授業は、ピストル射撃だろう。体育館の地下に地元の警官が練習に来る本格的な射撃場があり、そこで授業を受けた。50 フィート先の的を 30 秒かけて 10 発撃つ。もちろん実弾は使わないが、銃の扱い方についての基礎を徹底的に教えてくれる。10 回ほどの授業を受ければ、100 発 100 中の腕前になる。

アメリカ北東部はアイススケートが盛んなようで、アメリカ人はアイスホッケーの授業を取るが、私はビギナー用のアイススケートの授業を取った。生まれて初めてアイススケートをする人を対象とした授業だが、10 回程度の授業の達成目標は、後ろ向きに滑って、回転できることであることを 1 回目の授業



写真 14  
アメリカ合衆国 ウィスコン州  
ジョンソンワックス本社  
1984年8月

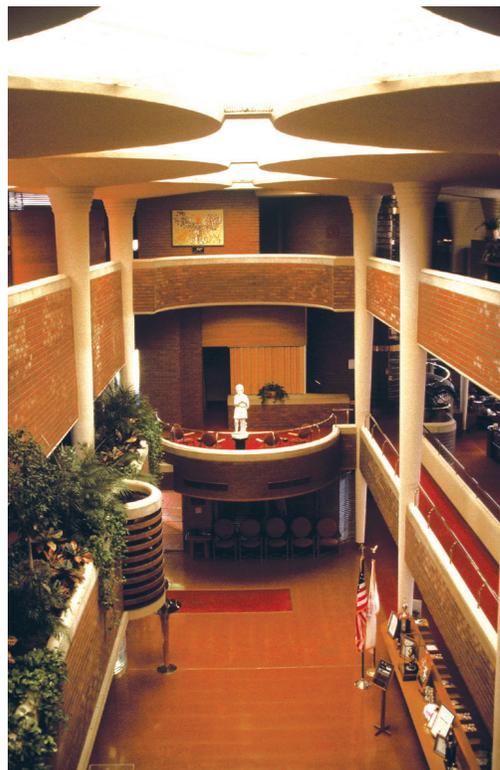


写真 15  
ジョンソンワックス本社  
玄関ロビー

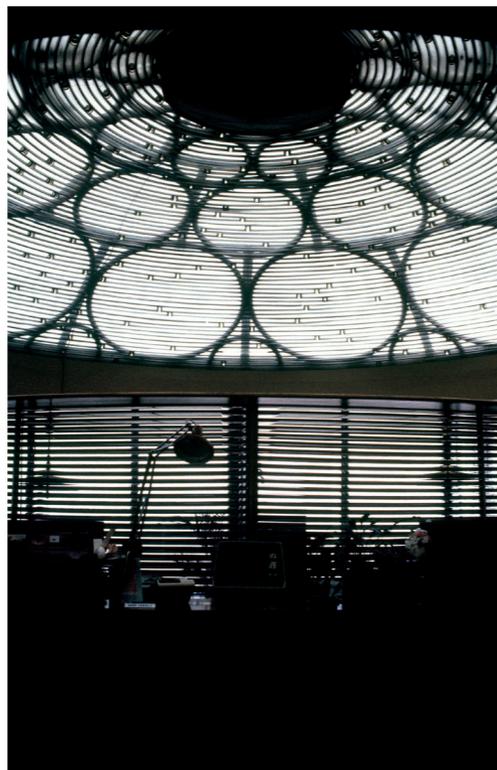


写真 16  
ジョンソンワックス本社  
役員室



写真 19  
ジョンソンワックス本社  
オフィス内部

写真 20  
ジョンソンワックス本社  
オフィス内部



写真 21 MITの西キャンパスに建つ建築家エーロ・サーリネン設計のチャペル 1955年、隣に立つクレスギー講堂と同時期に竣工。教会の周りには水盤に反射した光が内部に差し込む。2015年に全面的に修理されている。



写真 22 チャペル内部はトブライトから光が落ちる静謐な空間 この教会で結婚式を挙げる学生もいる。

で説明を受けた。そんなことが 10 回授業を受けるだけで出来るようになるものかと思ったが、実際、講義の最終回の期末試験では、ほとんどの人が、出来るようになっていた。達成目標を最初に明確に示し、毎回の授業でその目的を達成するために何を学修するのか明確に設計された典型的なアメリカの授業のような気がした。

ボストンの冬は厳しく、大学の横を流れるチャールズ川が凍結し、人が歩いて渡れるほど分厚い氷が張る年もある。12月

のクリスマス休暇に続き、約1カ月間休講になるが、その間はIAP (Independent Activity Period) と呼ばれ、自主的なゼミや集中講義等が数多く開催される。正規の授業では行えない途上国の開発に関するワークショップや、北極圏の油田開発に関する分野横断的な集中講義など、MITらしさを感じる機会であった。

2年目は、近くにあるハーバード大学の建築学部GSD (Graduate School of Design) でビジネススクールの教授が建築実務に関する講義を新設するというので聴講しに行った。MITの中間レポートなどが忙しくて、授業を欠席したところその日の夕方、TA (Teaching Assistant) の女学生から自宅に電話がかかってきた。一回、欠席したので成績はBになるわよ！と厳しい声。もう一度、やむを得ず欠席したら、今度は教授本人から電話がかかって来て、単位は与えないとのこと。単位はもらえないが、先生の講義は勉強になるので聴講させてほしいと言ったところ、快諾して頂いたが、如何に教師も学生も真剣に授業に取り組んでいるかを知ることとなった。

MITやハーバード大学のGSDでは正規の講義が終わった夕方から、毎月1回ほど、特別講義が開催される。マイケル・グレイプス等の人気建築家やランドスケープアーキテクトなど、その時代を代表する建築家、専門家の講義を聞くことが出来て、とても刺激的である。長身のフィリップ・ジョンソンは身の丈ほどの棒を使って熱弁し、英国の建築家ジェームズ・スターリングはメモリアルホールの大講堂を学生で埋め尽くした。世界各国で活躍する第一線の人の話を聞く機会が豊富なことや、キャンパスに名建築が数多くあり生活の一部になっていることは、若い学生が建築を学ぶ環境として理想的であった(写真21、22)。

私がMITで一番、好きな時間帯は朝である。MITの東側は教室や研究棟が立ち並んでいるが、建物をインフィニット・コリドー (Infinite Corridor、MITの各建物を繋ぐ251mの廊下) が貫いている。冬が厳しいケンブリッジに相応しい建築の作り方であるが、その廊下を、毎朝、教員、学生が颯爽と、教室や研究室に

向かって速足で歩いて行く。充実した授業、先端的な研究など知的刺激に満ち溢れ、ノーベル賞を受賞された教授の研究室も随所にある。いかにも活気ある、生き生きした雰囲気で毎日が始まるのである。日本の大学ではこのような雰囲気を感じられないのは残念で、申し訳なくもあるが、前述した中国の大学では似たような雰囲気を、朝の登校時に感じることもある。アメリカも、中国も、学生はキャンパス内にある学生寮に住んでおり、毎朝、長時間かけて通学してくる東京の学生とは事情が異なる。しかも日本の学生は、夜遅くまでアルバイトをせざるを得ない事情も抱えており、授業中に居眠りをしている日本の学生を責めることはできないかもしれない。しかし、日本のある大学で教えている中国人の教員から、日本の大学における学生の学修態度について、このような事では日本の未来はないと言われたことがある。日本では過密都市、東京の大学に進学する学生が多い反面、地方の大学は進学者が減少しているが、海外では地方に有力大学が数多く立地している。生活費の高い東京の大学に進学してアルバイトに時間を割くのではなく、地方の大学に学生寮を建設して、日本の学生が勉強にスポーツに、もっと有効に時間を使えるようにすべきではないだろうか。

私の30年以上前の拙い留学経験を述べさせていただいたが、この歳になって改めて、多くの方のお世話になったと感じている。当時、親切に対応して頂いた方に御礼をする機会もな

く申し訳なく思っているが、今の私に出来ることは、縁あって日本にやって来る海外の留学生に対して、私が若い時にしていたように、出来るだけの対応をすることであろう。それはどこの国からくる学生に対しても同じことである。私が留学した時は一ドル273円の固定相場制で、一年間の授業料は私の年収に相当する金額であった。インターネットはまだない時代である。日本に電話をするときは、出来るだけのコインをあらかじめ公衆電話に挿入し、クォーター (25セント硬貨) を1カートン用意して、次々にコインを入れながら通話するのだが、硬貨が落ちるのが早く途中で通話が切れるほど国際電話は高額であった。職場で留学したいと言ったら人事局人事課の人事係長に呼び出されて、「郵政省の建築の技官が国際的な仕事を有する機会は現在も、将来も決してありえない。留学は認めない！」と断言された。企業派遣の留学とは違い、私の場合は自分で準備をし、自分で道を切り開いていくしかなかったわけだが、結果的にはそのことがとてもよかったと思っている。最近の国を挙げての「グローバル人材育成事業」は学生の留学促進のため、資金的な支援だけでなく、留学先の大学との交渉なども大学が行い、教員が引率するプログラムも多いが、果たして本当にそれが学生のためになっているのか疑問に思うこともある。若い人にとっては、自分の力でチャレンジしたことだけが、自分の力になるのかも知れないと思う。

#### 参考文献

- 1) 世界の伝統的建築構法 第5回 中国安徽省の古民家群 宏村・呈坎、南一誠、建材試験情報 2016年5月号、pp.24-29
- 2) 安徽省黄山の古民家群 宏村・呈坎、南一誠、UNIBOOK、2016年2月22日
- 3) 中国徽州に残る古民家の現状と住戸改修の必要性、馬 凌翔、南一誠、日本建築学会大会学術講演梗概集 (中国)、E-1 分冊、pp.813-814、2017年8月
- 4) Possibilities of Sustainable Social Housing in Lagos Nigeria; A Casestudy of the design, Specification and Adaptability of the new Lagos Homs Housing Scheme, Oluwasegun Akande and Kazunobu Minami, UIA 2017 Seoul World Architects Congress, September 2017, Paper Code O-0332
- 5) A Study of the Mass housing Usage, deterioration and Refurbishment in Lagos State Nigeria, Akande Oluwasegun, Minami Kazunobu, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (中国)、E-1 分冊、pp.1043-1044、2017年8月
- 6) 芝浦工業大学におけるグローバル人材の育成 一建築系学科における取り組み一、南一誠、UEDレポート2013夏号、2013年7月、pp.33-37